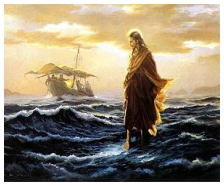

【しっかりしなさい。おそれることはない！】

聖書本文:マタイの福音書14章22-27節 / 暗唱聖句:マタイの福音書14章27節　　説教者：鄭南哲牧師

私が行ったことのある国の中でとっても印象的だったところがあります。オーストラリアの中メルボルンという町です。美しくて素敵な町で、人が住みたい町の世界１０位以内に入るほどの町です。しかし、このメルボルンには一つ住みにくいことがあります。それは気まぐれな天気のことです。午前中にははれで暖かいかなと思うと、すぐ曇ったり、風が激しく吹いたりして、気温が下がって冬の厚いコートを着らないといけないような変化不測(ふそく)の天気の町でした。ですから、メルボルンに住んでいる人はいつも４つ季節の服を着れるように準備しておくのだと聞きました。愛するみなさん！よく考えて見れば、メルボルンのよく変わる天気のように我々の人生もそれと似てるのではないかと思います。我らの人生もやろうとするすべてが順調にうまく行って幸せだなと思ったら、すぐ難しいことが起こって胸が裂けれるような苦しみが襲って来る時もあるでしょう。今日の聖書の本文マタイの福音書１４章２２-２７節には、気まぐれな天気のような人生を断片(だんぺん)的に表しているような場面が出ています

<本文>

今日の聖書本文を見ると、イエス様の弟子たちは今湖の舟の中で激しい風浪(ふうろう)にもられて生死(せいし)の岐路に立て見当(けんとう)がつかない大変さの中にいます。ところが、彼らがこんな苦しみを目の前にする直前にどんなことがありましたか。そうです。五つのパンと魚二匹で男だけで５千人、女と子どもたち合わせて約２万人ほどの群衆を食べさせても１２のかごが残るほど一生忘れられない素晴らしい奇跡を体験したばかりの時でした。

そんなに驚いて感激した奇跡の体験をしたばかりなのに、今はまた全然変わって生死の岐路に立っていて死にそうになっています。これこそ人生じゃありませんか。ですから、今までものごとが順調である方がいれば、自慢しないで下さい。いつか嵐がやって来るか、いつ強風が吹いてくるかわからないからです。反対に、いまマタイの福音書の１４章の弟子たちのように苦しみの中にいらっしゃる方や通っているような方がいるなら、あまり絶望しないで下さい。いつそうしたかのようにかならず神様の恵みによって追い風(順風;じゅんぷう)に乗せられる素晴らしい神様の祝福をかならず向かえる日が来るからです。そういうわけで旧約の伝道者の書にはこのような箇所があります。

“順境の日には喜び、逆境の日には反省せよ。これもあれも神のなさること。それは後の事を人にわからせないためである。”(伝道者の書7:14)

順境の日には神様に感謝し、苦しみの時はどうしてこんなことが起きたのか自分を顧みながら、これを通して神様が自分に何を教えようとしているのかを考えなければなりません。神様はこの二つを平行(へいこう)させてくださることにより人が人生の先をわかることができないようにされたと伝道者の書は教えて下さっています。もう一度本文に戻りましょう。

1.波に悩まされた原因はだれにありますか。

今弟子たちは彼らが考えもしなかった緊急事態に追われています。今日の本文をもっと深く理解するために、まずこの出来事の原因提供者はだれなのか?を考える見る必要があります。みなさんはイエス様の弟子たちが向かい風、激しい強風を受けて波に悩まされる状態にさせたのはだれだと思いますか。ただの運が悪い偶然なことでしょうか。それとも弟子たちですか、群衆ですか、イエス様ですか。それはイエス様でした。今日の本文である**マタイの福音書14章22節**を御一緒に読んでみましょう。

“それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸へ行かせ、その間に群衆を帰(かえ)してしまわれた。”イエス様が弟子たちを催促（さいそく）して舟に乗り込ませた時はどんな状況でしたか。弟子たちは五つのパンと二匹の魚の奇跡を目撃したばかりの時でした。群衆たちも当然興奮（こうふん）状態だったはずでしょう。かりに、イエス様が弟子たちを催促しないで、そのまま置いたならば、その感激と奇跡の場を離れたがる人はいたのでしょうか。きっと夜中(よなか)までパーティをしたかも知れません。奇跡を通して群衆たちはイエス様こそ王になれる能力があるという確信を持ったかも知れません。“イエス様を王にしよう！イエス様ならきっとこのローマの支配からイスラエルを救ってくれるメシアに間違い！”と叫んだ人も多くいたかも知れません。イエス様の弟子たちもこの興奮の場を満喫していたかも知れません。しかし、イエス様はむしろ、弟子たちを催促してその場を離れさせます。そして強いて舟に乗り込ませました。

我々の考えでは人々からの拍手や熱狂(ねっきょう)が人生の成功だと思うかも知れませんが、イエス様の観点ではそれは弟子たちにとって何の助けにもならず、むしろ危険だと思われたようです。弟子たちがこの奇跡の雰囲気に心が奪われるより、嵐の中で自分の信仰を強め、神様の能力と慰めを経験した方がもっと有益だったと思われたゆえ、弟子たちをそのように導いたのが分かります。そういうわけで弟子たちは彼らが波に悩まされることを御存知だったのにもかかわらず、舟に乗り込ませ、イエス様は彼らのために祈られました。

しかし、今日のマタイの福音書14章を黙想しながらなかなか理解できなかった二つの疑問がありました。それはなぜ、弟子たちはイエス様のお言葉の通りに従ったのに苦痛と苦しみを受けなければならなかったのか。そして、なぜイエス様は弟子たちの苦しみはすぐ答えて風をやませ、波をすぐ静められなかったのでしょうか。これは我々の実際の信仰の生活の中でいつでもありえることなので、みなさんにとっても関係ある質問だと思われます。

2.イエス様はなぜすぐ波を落ち着かせなかったのか?

弟子たちはイエス様に従って舟に乗ったのに、なぜ苦しみを受けたのか?を考える前にまず、このような状況を許されたイエス様の行動と反応について先に考えて見たいと思います。イエス様が間違えて弟子たちを困らせたならば、イエス様は弟子たち

をはやく助けてあげるべきでした。しかし、イエス様が弟子たちに現れたのはいつなのか本文の**25節**をもう一度見て見て下さい。**“夜中の３時ごろ”**でした。弟子たちがいつから波に追われていたのか学者たちによって意見がちょっと違いますが、**ヨハネの福音書６章１６節**によると、**“夕方になって、弟子たちは湖畔(こはん)に降りて行った。”**おそらくイエス様の弟子たちは夕方ごろ、舟に乗ってから、**嵐は夜の９時前後から**始まったのではないかという見解(けんかい)が多いです。そしたら、弟子たちはすくなく夜中３時まで約６時間ほど嵐に襲われていたはずです。イエス様はどうしてもっとはやく弟子たちに来なかったでしょうか。**もっと不思議なのはイエス様はその光景をずっと見ておられたということです。マルコの福音書６章４８節**によると、イエス様は弟子たちが向い風のために漕ぎあぐねているのをご覧になっておられました。そして、イエス様はその光景をごらんになる前にすでに弟子たちが受ける苦しみについても知っておられたはずです。

愛する信仰の家族のみなさん!苦しみの中に置かれている弟子たちをイエス様はただ見ておられたのが理解できるでしょうか。しかし、私たちの人生においても苦しみの中にいる時、イエス様は傍観（ぼうかん）されているように、沈黙されているように感じる時が時々ありませんか。仕事で韓国に行って、早朝の祈りに出て見ると、朝の５時にもどれだけ多くの方々が出席して自分の祈り課題を涙をもって切に祈っているか分かりません。事業や、子供たちの進路や進学のために、結婚のために、健康のためになどなど、さまざまな悩みと苦しみの課題を持って時には断食しながら、時には嘆きの叫びの祈りで神様に切に祈っている姿がよく見えます。そのぐらいだったら、神様が待てたのようにすぐ答えて下されば どれほど嬉しいでしょうか。もちろん、ある時は生きておられる神様はある時は劇的に、早速不思議な方法で答えて下さる時もあります。しかし、多くの場合、祈っても祈ってもなぜか神様がすぐ答えて下さらない時が結構あるでしょう。多くの場合朝早天の時も、夜も切に祈っても神様はすぐ応答して下さらず、自分の都合や祈りに目をそらしているように沈黙されているように感じられる時がみなさんにもあったと思います。私にもよくあることなんですよね。なぜでしょうか。

<夜中３時になるまで待っててておられるイエスキリスト>

どうしてイエス様は弟子たちをもっと速く助け、救って下さらなかったのでしょうか。どうして夜中３時ごろになってようやく弟子たちに歩いて来られたのでしょうか。愛する信仰の家族のみなさん！よく考えて見て下さい。イエス様の弟子たちの大体の仕事は何でしたか。そうです。漁師でした。前職(ぜんしょく)漁師の出身だった弟子たちが舟に乗った時、すぐ黒雲が空を覆って、風が吹き始めたと考えて見ましょう。最初から彼は驚いたと思いますか。慌(あわ)てたと思いますか。乗る時からもし危険だったら、漁師の出身だった弟子たちは初めから乗らなかったと思います。おそらく弟子たちは以前漁師だった時、似てる危険な経験をしたこともあって、しばらくどうすればいいのか分かっていたと思います。‘今のぐらいなら、問題ないじゃん！大丈夫だって！’自分たちが達人(たつじん)のように余裕を持ってたかも知れません。９時ごろになって、だんだん風も強くなり、波が高く激しくなり始めます。自分たちが高段者(こうだんしゃ)だとゆったりしていた弟子たちが少しは心配しながらでも、自分たちの経験を生かして、おれの経験ではこの時は帆(ほ)をあちの方向にするべきとか、いやこちの方に曲げるべきとか議論しながらでも進んでいたと思います。みなさん！もしもこの時、イエス様が弟子たちに来られて、以前イエス様がなされたように**“波よ！静まれ(マルコ4:39節)”と命じて突風や荒波を静まさせたならば、弟子たちの反応はどうだったと思いますか。**

おそらく“イエス様, このぐらいはおれたちで解決できたのに余計なことをなさいましたね。俺たちの実力を信頼しないでしょうか。”という反応を見せたかも知れません。しかし、時間が経てば経つほど風が強くなってきます。舟の舵（かじ）も聞きません。弟子たちは夜中3時になるまで自分たちの経験と技術をすべて用いてみたと思います。しかし、時間が経てば経つほど荒波が強くなって来るのに、自分たちの力ではどうしようもできず、不安になって来ます。彼らは‘もうこのように死ぬのか。ここで終わりなのか。’という思いしかなかったかも知れません。きっとその時が夜中の3時ごろだったのではないかと思います。

愛する信仰の家族のみなさん!**神様は私たちにもこのような‘深い夜、霊的な夜中3時’の時間を与える時があります。今日の御言葉はただの時間的な夜中3時を言っているのではありません。神様の時間で霊的な深い夜中3時はいつでしょうか。我々の人生においてもいつが夜中の3時ごろでしょうか。**自分の努力、自分のノハウ、経験など、自分の力では絶対できないと両手をあげるその瞬間、その時が夜中の3時ではないかと思います。**イエス様が丘の上で嵐に追われている弟子たちを眺めておられた理由は、彼らをただ困らせるためではありませんでした。イエス様はこの夜中3時まで待っておられたのです。きっとイエス様は弟子たちにこのように考えながら見つめておられたではないかと思います。**‘自分たちの力で一度頑張ってみなさい。自分たちの経験、知識、持っているすべてを全部使ってみろ。かならず自分の限界を感じるだろう。私を信じると言いながらどれほど自分たちの力によって生きようとしているのか。..自分たちの信仰がどのくらいであるか試してみろ..’

“神様、もうこれ以上はできません。お手上げです。神様、お願いです。助けてください。！”“その夜中3時ごろ”イエス様が弟子たちに現れます。神様にひざまずいてただ神様の恵みだけを求め、神様だけに頼る時、ようやく神様は私たちに来て私たちを助けてくださいます。神様は我々の心を見抜いておられる方です。みなさんがどんな心と信仰の姿勢で生きているのか、神様だけを信じ、頼って神様の恵みを求めているのかどうかすべてを知っておられる方です。ここに座っておられるみなさんはどんな心と信仰の姿勢をもっているでしょうか。いま苦しんでいる方々はいませんか。心に傷と苦しみを抱いている方はいませんか。時間的に夜中3時はいまから16時間後には来ますが、霊的な夜中の3時はすぐでもやってくることだと信じます。いまの時間もう一度神様にすべてをおろすなら、我々の人生にはすばらしいみわざが起こると信じます。

3.従ったのに、なぜ嵐に襲われたのでしょうか。?

二つ目に, 弟子たちはイエス様のおっしゃるとおりに舟に乗ったのに、なぜ激しい波にあったのでしょうか。舟に乗っていた

弟子たちは混乱していたかもしれません。‘イエス様が促してくださらなかったら、こんなめにあうこともなかったのに、なぜ？’みなさん、大切な事実はこんなことが聖書だけ、イエス様の弟子たちにだけ起こりうることではないことです。このようなことはイエス様を信じている我々の人生にも起こりうることです。‘イエスをしっかりと信じればかならず祝福される。イエスを信じればかならず癒される。’という話をよくきいたことがあると思います。しかし、我々の周りにはイエスをしっかり信じているのにもかかわらず、さまざまな苦難と苦しみを受けている場合がどれだけ多いのか分かりません。私たちがよく聞いている証の中で、不景気の中で日曜日の礼拝を守るために店を閉めたら、突然土曜日に売り上げが倍になったという話を聞く時があるかも知れません。しかし、このような証を聞きながら感動とチャレンジを受ける信徒もいると思いますが、心にはくやしがっている信徒もいます。‘私も日曜日に店を閉めたが、結局つぶれてしまったのに．．．’
イエスをちゃんと信じるならこの地上で祝福され思うようになるという説教を聞いたことがありますが、現実はそうでない場合も多くありません。生きているうちに嵐に襲われている弟子たちのようにイエス様のみことばに従ったのに、むしろ苦しめられる場合がしばしばあるからです。

<従いながら受ける苦しみは祝福です。なぜならイエス様の力を経験することができるからです。！>

このように考えて見ましょう。五つのパンと二匹の魚の奇跡で喜んでいた12人の弟子たちの中でイエス様に“舟に乗って行きなさい。”と言われた時、十人の弟子たちは従ったのに、二人の弟子が従わなかったとしましょう。“イエス様、もう疲れていやです。私はいまここが良いです。舟には乗りたくありません。”それで１０人の弟子たちだけが舟に乗ったのに、嵐に襲われたなら、弟子たちはどう思われたでしょうか。‘あ、不従順した二人の弟子たちがうらやましい。我々はイエス様に従って、こんなに苦しんでいるのに、従わなかったほうがましではないのか。’このように考えることができると思います。確かに、10人の弟子たちはイエス様に従ったため舟の中で苦しみを受けました。そして二人の弟子は不従順したのに、その苦しみから避けることが出来ました。しかし、二人の弟子たちは決定的に経験することが出来なかったことがあります。**それは自然さえも静まれる創造主なるイエスキリストの力です。十人の弟子たちは従ったため苦しみは受けましたが、だったからこそ自然をも静まれる生きておられる神の御子イエスキリストの力を直接経験することができました。**

愛する信仰の家族のみなさん！今日も教会の中でこの二人の弟子に該当（がいとう）する人々がいます。しかし、彼らがもっとうまく生きているように見えます。主日礼拝を守らず、正直な献金生活をせず、自分勝手に、自分の好き勝手に信仰の生活をしている人々がもっと祝福され、楽に生きているようにみえませんか。むしろイエス様のお言葉通りにちゃんと信じて、まじめに教会生活をしている人々が経済的に苦しみ、肉体的に苦しみを受けている場合がもっとあるようにみえます。しかしみなさん！我々が覚えるべきことはあまり従わないで信仰の生活をしている人々は楽に教会には通えるかもしれませんが、生きておられる神様の力は経験することはできません。なので、どうやって信仰の根を深くおろし、信仰が強くなることができるでしょうか。従わない人は教会には通っていても神様のまことの御力を経験できなかったため、イエス様を深く体験したことがないため突然の嵐の前ではすぐすべてをあきらめてしまうのではありませんか。

愛する信仰の家族のみなさん!イエス様の御言葉に従わなければ人生のあらしもなくもっと楽に生きることができるかも知れません。しかし、人生にやってくる嵐をも静まれる神様の御力をも経験することができません。イエス様を信じていると言いながら、まだ一度も生きておられる神様の恵みを経験したことがないといわれる方々を見るととっても残念です。なぜなら、我々が信じいるインマヌエル、つまり我々とともにおられるイエス様は復活されいまも生きておられるからです。ですから、いまも我々は神様の恵みと力を実際に経験し、体験することができるはずです。従うことなく、一時的な嵐をさけることだけを自慢するクリスチャンではなくあらしを静まれる神様の御力を経験し、どんな嵐の中でも突破し、前進し続けるクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますよう主の御名によって祝福します。

<従えば、イエス様のなぐさめも経験することができます。>

結論的にまとめます。神様の御言葉どおりに従ううちに苦難にあったとき、生きておられる神様の力だけを経験することではありません。神様に従って、苦しみを受け、苦難にあったとき、イエス様の深い慰めも同時に経験することができます。イエス様の慰めが我々に祝福となると信じます。われわれが受けているさまざまな苦しみの中で、苦しみとして変装（へんそう）してくる神の祝福かどうかをどうやってわかるでしょうか。正解は簡単です。主からの慰めがあるならそれは、変装してやってくる神様の祝福であることだと信じても良いと思います。本文の**１４章２７節を一緒に読んでみましょう。“しっかりしなさい。わたしだ。おそれることはない。”アーメン！**

愛するクリスチャンプレイズチャーチのみなさん!水の上を歩いて来られたイエス様は嵐を静める前に、イエス様の慰めがさきにあったことを覚えて下さい。人生においても予想もしなかった嵐があり、苦しみがあり、苦難があるかも知れません。その苦しい状況と環境はすぐに変わらないかもしれないですが、我々のたましいに、我々の心の奥底まで染み込むイエス様の慰めはいつもかわらぬあることを覚えましょう。“安心しなさい。私だ。恐れることはない。！”また一週間も、一日一日変わる人生の航海においても嵐を静める主なるイエスキリストの力と深い慰めの祝福を体験し、望みの港に着く祝福をいただくみなさんとなりますよう主イエスの御名によって祝福します。アーメン！